

中国古代の地理思想の思想史的研究

—「淮南子」地形訓と「漢書」地理志について—

薄井俊二

はじめに

「地理」という語は、語義的には土地ないしは大地のすじめ、もしくはその状態、「ありよう」を意味する。海野一隆氏は、この「地理」なる語を題名に冠する中国の古典籍は内容的に大きく二つに分けられるとする。一つは客観的記述を旨とする地誌の類であり、もう一つは卜占的な内容の風水書である。そしてこうした内容上の差異は、土地の「ありよう」のどんな点に着目するかによるとされる。氏の言を今少し広げていうと、客観的な地誌も卜占的な風水書も含め、土地の「ありよう」を記したものが地理書であり、そこに盛られている土地の「ありよう」に関する学問・思想を地理学・地理思想といふことができよう。

ところで、学問や思想活動というものは、それがあつた時代、地域、社会に特有のものであれ、あるいはもっと普遍的な問題であれ、解決すべき何かの問題、克服されるべき課題があり、それらを解決、克服しようとして進められ深められるものである。そこでその学問や思想が解決をめざしていたもの、又は与えられていた課題、荷つ

ていた役割りは何であるかが問題となるのだが、この点地理思想の場合はどうであろうか。

例えば海野氏は、先の二種類の地理書について、客観的地誌は、主に政治・軍事の資料として国土の記述を念頭においたもので、いわば官の立場からの地理書である。風水書の方は、主に家相・墓相を考える手だてとしての土地のたたまいに注目したものであり、いわば民の立場からの地理書であるとされる。

筆者は氏の分析を大枠において妥当と考えるが、個々の地理思想、地理書については尚検討の余地があるものと考える。本稿は中国古代の地理思想、地理書について、それがどんな役割りを荷い、また何を意図して作られたのか、言い方を変えればその地理思想、地理書がどんな意味を持ち、当時の思想界や社会全体の中にどう位置づけられるのかを考察する試みである。

さて中国古代の地理書といえ、まず「尚書」禹貢篇と「山海經」とがあげられよう。本来ならばこの高名な二つの資料から検討を始めるべきであろうが、両書ともその成立年代や作者像についてあまりにも問題が多すぎる。そこで両書の検討は今後の課題として、

今回は比較的素性の明らかな資料である「淮南子」地形訓と「漢書」地理志をとりあげることにする。

一 「淮南子」地形訓

筆者は以前「淮南子」地形訓の地理思想について若干の考察を行ない、あらまし次の結論をえた。²⁾それは、この「大地の表面に関する議論」という名の一篇は、戦国時代から漢初にかけて生み出された様々の地理、地形に関する思想、伝承を収録したものである。そしてそれらは無目的に雑然と並べられているのではなく、①「地の全体像」・②「地表上の諸原理」・③「地理的知識」という三つのテーマに従って配されており、この三つの小テーマから「地のこと」という大テーマを照らし出そうとしたものである、と。もう少し詳しくいえば、①は大地の中心、同心円的構造、方位など地上世界を構造的に把握し理解しようとしたもの。②は地表に存する諸物や地形の差異・変化の様を述べ、併せてそれをもたらず要因・原理をおさえたもので、地表の諸原理から地上世界を説明把握しようとしたもの。③は異域誌・博物誌・河川誌といった地誌的なもので、記述する内容の量を誇っている。いわば様々な地理上の知識を備えていることで世界を把握しようとするものである。そして地形訓全体で目指したものは、地理的世界を様々な角度からとらえ、それによって世界をあますところなく説明し把握することにあつたのである。

次に地形訓の意図を右のようにみる私見を裏づける為に、「淮南子」全体に視野を広げてみよう。「淮南子」の総序と言える要略で

は、原道以下泰族に至る二十篇の内容、その意味するところを述べた後、次のようにいう。「故に書二十篇を著して、則ち天地の理究まり、人間の事接わり、帝王の道備わる」と。即ちこの書には、天地自然、人間社会、理想的政治実現の手だて総てが備わっているとす。続いて「太公の謀」から「商鞅の法」に至る諸思想・著述の意義を説き、それらを超えて「劉氏の書」こそ天地古今の事に通じ、「以て天下を統べ、万物を理め、変化に応じ、殊類に通じた」ものだとする。つまり「淮南子」は天地古今万物のことをその変化とも併せて説明しきついている、世界のあらゆることを網羅的、包括的に把握しているといふのである。

更に金谷治氏は「淮南子」の思想史的位づけを、本書において初めて結びつけられた「老莊を中心として諸思想を折衷的に包摂した統一のばを構成し」て、「統一王朝の出現にともなう統一理論を要請する大きな歴史的要求」に対して、「道家の立場から提出された試み」であるとされた。この試みが実際にどれほど成功したかはおくととして、前漢王朝体制を支える統一的世界像を思想の側から作り出そうとしたものであることは間違いない。

「淮南子」全書の性格、意味が以上のようにであるとすれば、それが先に検討した地形訓のそれとつながるものであることは明らかである。即ち前漢王朝体制を支える統一理論の提供をねらい、世界を包括的に把握しようとした「淮南子」全書中であつて、地形訓は地表のこと、地理の面から世界をあますところなく説明しようとしたものなのである。

二 「漢書」地理志

後漢の班固の著述した「漢書」には、主に前漢の地理について述べた地理志という名の一篇がある。これについては既に專論が二、三あるが、筆者の立場からみれば十分に説明されているとは言いがたい。そこで次にこの地理志をとりあげるが、ここでは先ず「漢書」全体の問題から考察を始めることにする。

「漢書」は一般に、前漢一代の歴史を記述した断代史とされるが、「後漢書」班固伝によつてその成立の経緯を述べると次の如くである。光武帝建武三十年（五四）、父の班彪が死ぬと、班固は郷里に帰り、父の遺作であつた前史（「史記」を継ぐ前漢の通史）を完成させるべく著述活動に専念する。ところが明帝の時に成り、班固が国史を勝手に書き換えていると誣告するものがあり、彼は獄に下されてしまふ。しかし間もなく出獄すると、彼の異材を奇とした明帝により秘書を校典する蘭台令史に任用され、今度は勅命により国史を編纂することになる。そして二十年余りの歲月をかけ、章帝の建初中（七六・八三）に至り一応の完成をみたという。

では班固の「漢書」著述の目的、漢国家が彼に描かせようとしたものは何だつたのだろうか。右にみたように「後漢書」は父の遺業を継いだものといひ、また班固自身も叙伝において、「史記」は武帝の太初以降の記事を欠くのでそれを補つたのだという。そして「漢書」とは前漢十二代、二百三十年間について「其の行事を綜べ、旁考五經を貫き、上下洽く通じ」て本紀以下の項目を立てて記述したという。その史実を客観的に伝えるという姿勢は、司馬遷にも

通ずる史官としての意識を示していようし、五經に言及するところには儒者としての自覚が伺える。かく史官と儒者という彼の立場はわかるものの、この謙虚な序文のみでは「漢書」の意図するところは読みとり難い。しかも「史記」の欠を補うといひながら、それとの重複を含んで前漢一代を通じて記述の対象とするなど矛盾もある。そこでこの問題を考える為に「漢書」著述当時の思想界に目を転じてみよう。

刃土名朝邦氏は、光武・明・章帝三代の治世を後漢前期とし、この時期に思想界で重要であつた劉漢主義・讖緯・礼教主義の問題は、章帝期に入つて結びつき、漢礼制定の動きをたかめていったこと、そして頌漢主義と結びついた礼治主義の具体的な動きとして、白虎觀論義と曹褒による漢礼草稿の起草があるとされる。

さてこの白虎觀論義だが、これは章帝建初四年（七九）、未央殿の白虎觀に諸儒を集め五經の異同を論議させた、御前學術討論会ともいふべきものである。前漢宣帝期の石渠閣論議を継ぐものとされ、漢代思想上の重大事業の一つといえる。結局意見の一致をみることはできなかったものの、一応議論の内容がまとめられて章帝の決裁を受ける。そしてその折の上奏「白虎議奏」を勅命により班固がまとめたのが「白虎通義」である。この白虎觀論義と「白虎通義」の思想的意味について町田三郎氏は次のようにまとめられる。

『白虎通義』は、従来の經学説に大中に讖緯説をとり込んで皇帝を絶対化神秘化しつつそれに見合った世界構想、秩序を社会のあらゆる階級・事物にふりあてて説明し（中略）ひとまずこうした

形で後漢王朝の体制の完整性を示そうとしたものと思われる。ともかくも世界の説明であった。そしてそれは前漢末王鳳らの意識にあった「六経は世界のすべてに責任を負いうる」とする主張の流れを引きついで、しかもより精密に解答を形而上学的展開において与えるものであった。

長々と引用させて頂いたが、これを筆者の立場から大ざっぱにまとめると次のようになる。即ち、「白虎通義」とは、皇帝を頂点とする礼教的国家の理想像、後漢王朝体制下の調和した世界を描こうとしたものであり、それは前漢末より後漢前期にかけて儒教内部で行われてきた、儒教の立場からの世界の説明、把握の試みの一つの結実なのである。つまり班固の命ぜられた任務は、こうした儒教による世界把握の試みをとりまとめるといふ、極めて重要なものだったのである。

またこれより少し後の、曹褒の漢礼起草の時にも班固が関わっている。「後漢書」曹褒伝三五によると、元和二年（八五）の詔により章帝に漢礼制定の意志があるとみた曹褒は、再三にわたる上奏を行ない、遂に章和元年（八七）勅命を受け漢礼百五十篇を起草する。

これは結局、翌年二月の章帝の死により陽の目を見ずに終るが、この間班固が数々舞台に登場している。元和三年には皇帝の下問をうけ、「宜しく広く（京師の諸儒を）招集して共に得失を議すべし」と勅言しており、またその翌年には叔孫通の「漢儀」十二篇を皇帝にたてまつっている。

以上のことから伺えるのは、後漢前期、それも章帝期ごろには、新しい礼制国家・礼教的世界構想が盛んに議論されていて、班固がそ

のただ中にいたらしいことである。

さて後漢王朝と班固をめぐる状況が右の如くであったとすれば、そのことと班固の「漢書」著述との間に何らかの関連性が見出せるのではないかということになる。つまり一方で新しい世界構想が進められているなら、それと表裏一体の動きとして、かつて存在した世界をしっかりと把握しておこうとするものがあつたのではないか。即ち、「白虎通義」のような礼教秩序という新しい世界把握の試みと呼応するものとして、現王朝と関連の深い前代の世界、即ち前漢王朝支配下の世界を、儒教の立場から把握しておこうとする動きがあつたのではないかということである。そしてこうした儒教の立場からの世界把握の試みと、史実を記録するという史官の立場とが結びついたものが、班固の「漢書」著述であつたと考えられるのである。つまり、班固の「漢書」著述の目的は、前漢王朝支配下の世界を儒教の立場から把握し説明することにあつたと考えられる。こうであれば、「漢書」が前漢一代を記述の対象にしてほめていることも、「史記」との重複を敢えてしたことも説明がつくであろう。

では次に、「漢書」著述の目的は前漢王朝支配下の世界をとらえることにあつたとする右の仮説に立って、「漢書」全書、また地理志の内容を検討してみよう。まず「漢書」全体だが、「本紀」は、世界の絶対的支配者である高皇帝より孝平皇帝に至る十二人の皇帝達の事蹟を述べたものといえる。更に彼らは常に世界に唯一人の存在であるわけだから、それは世界を通過的にみてゆく時の基準となる。つまり「本紀」は、世界の時間を漢の皇帝のもとに統一したものと

もなっている。次の「異姓諸侯表」から「百官公卿表」までの七つの表は、王朝のもとにある王侯・公卿・官僚達の構成を表の形にまとめたもの。残る「古今人表」は、この幅を広げ、つまり前漢王朝下に直属しない人も含めて、あらゆる階層・時代にわたって人々を網羅的に集め、一定の基準のもとに階級づけしたものである。いわば世界を構成する人々を、漢の政治制度、また儒教的価値観のもとにまとめあげたものである。「志」は、律曆・礼楽・刑法といった十の理論、学術、学問を述べたものだが、いわばこうした多くの部門を通して、世界を多方面からとらえようとしたものである。この中には対象とする分野の、前漢世界に至る変遷・流れを視野に入れて考察しようとする為、秦以前の事に言の及んでいるものもある。最後の七十「列伝」は、前漢世界に生きた様々な個人の事蹟を、中国外の異民族も世界構成の一員とみて含めて、記述したものである。とになる。

次に地理志についてみてみよう。その本文は三つの部分に分かれるが、その内容はあらかし次の通りである。

第一段は、黄帝の時代から説きおこし、堯の時代の禹の治蹟（尚書「禹貢が資料として全文引かれる）、周初の諸制度（行政制度として「周礼」職方氏が、また保障氏が引かれる）、春秋戦国時代の諸侯国割拠の有様、秦の統一から漢の成立、武帝の十三部刺史の設置までを記したものである。班固自身はこの部分をまとめて、「先王の迹既に遠く、地名も又数々改易され」ているので、「旧聞を采獲し、詩書を考述し、山川を推表し、以て禹貢、周官、春秋を綴り、下

戦国秦漢に及んだ」ものだという。つまり太古より漢帝国に至る帝王たちの支配と、その手だてとしての行政地理を叙述したものである。

第二段は、前漢時代に存した「京兆尹」から「長沙国」までの百三の郡国と、それに分属する千三百四十六の県道の簡単な沿革を述べ、それらに故蹟、山川、物産、人口、塩鉄官の所在などを付記したものである。更に末尾には秦から前漢代を通じての郡国数の推移、平帝末期の元始二年（二）の資料に基づく国土と墾田の面積、総人口が記されている。いわば郡国表とでもよぶべきもので、後世の正史の郡県志、州郡志の類はこの体裁を襲っている。

第三段は、漢代の行政区画である郡国制を離れ、前漢時代の全版図を十三の地域に分けそれぞれ地域における風俗、産物、歴史を相互に関連するものとして記述したものである。いわば風俗地理説とでもよびうるもので、劉向が前漢成帝の時に言上した星分によって地域を区分する分野説をもとに、「史記」貨殖列伝の記事や成帝期に朱轅が条した風俗資料を班固が復合して作ったものらしい。この第三の部分で注意すべきことは、史実を述べるといふこれまでの姿勢をやや離れ、観念的に作られた地理説であること、また班固がこの部分の序文で孝経の「移風易俗、莫善於教」を引き、これに対して「聖王上に在りて人倫を統理し、必ず其の本を移して、其の末を易う。此れ天下を混同して中和に一にし、然る後王教成る」と述べて、ここでいう風俗を礼教によって教化する対象ととらえていることである。つまりこの部分は、前漢世界を舞台としながらも、礼教的秩序を前提とした地理説を構想しているわけで、いわば世界把

握の一つのモデルを提示したのとなつてゐるのである。

以上述べてきた地理志の内容を、先に検討した「漢書」全書の意図——前漢王朝支配下の世界を把握説明すること——に沿つてまとめてみるところなる。つまり、まず国土をいかにして統治してきたか、言い換えると地理的世界をどう把握してきたかの歴史をおさへ次に前漢王朝支配下の世界を、その支配形態である郡国制のフィルターを通してとらえ、最後に礼教的国家を目指す後漢王朝がとるべき支配の仕方、世界把握の仕方を考える一試案として、風俗地理説を提示したものである。つまり地理志は、こうした三方面から地理的に世界をとらえ、世界の把握、説明を行なおうとしたものなのである。

むすびにかえて

本稿は、地理思想の荷つていた役割り、持つていた意図を、それが存した思想界、社会全体との関わりの中で考察したものである。今回は「淮南子」地形訓と「漢書」地理志に対する簡単な検討に留まったが、さしあたりこの二書に共通して伺えることをまとめ、むすびとする。それは政治思想としての地理思想ということである。

本論でみてきたように地形訓も地理志も、地表、あるいは地理の面から世界を把握、説明しようとするものであった。実はこの世界を把握するといふ意図は、皇帝や王朝、国家の統治者としての重みに関わる政治的色彩の濃いものであった。「淮南子」は淮南王劉安といふ漢王朝の中枢からややはずれた存在のもので、「漢書」は明・章帝というまぎれもない漢の皇帝のあとおしによつて作られたもの

である。いずれも漢の皇帝、王朝の世界支配を支えようとする思想活動の一環として位置づけられる。つまりこれらの書で、世界のことを普ねくおさえている、世界を把握しているとするのは、世界の統治者支配者としての漢の皇帝と王朝の完全性、完璧性を求めたものなのである。ここに政治思想としての地理思想の意味があり、これが官の地理のもう一つの役割りなのであった。

注

- (1) 海野一隆「漢民族の地理思想」(京大文学部地理学研究室編『地理の思想』所収、地人書房、一九八二)。
- (2) 拙稿「淮南子地形訓の基礎的研究」(『中国哲学論集』九大中国哲学研究会、第十号、一九八四)。
- (3) 金谷治「秦漢思想史研究」第五章「淮南子」の研究」(日本学術振興会、一九六〇)。
- (4) 岡崎文夫「漢書地理志に就いて」(『支那学』第二卷第二号、一九二二)。五井直弘「漢書地理志の一考察」(『中国古代史研究会編『中国古代史研究』所収、一九五六)。江畑武「『漢書』地理志の地理思想」(『文化史学』二三号、一九六八)。
- (5) 班固の伝記については、田村実造「班家の人びと」(『龍谷史壇』六八・六九、一九七四)に詳しい。
- (6) 辺土名朝邦「後漢前期思想界の諸問題について」(『九州中国学会報』第二四卷、一九八三)。
- (7) 町田三郎「後漢思想史研究のための序」(『東方学会創立四十周年記念東方学論集』、一九八七)。また町田氏のこの所説

は、刃土名朝邦『白虎通義』研究序説——新たな視座を求めて——（『荒木教授退休記念中国哲学史研究論集』所収、羣書房、一九八一）を下敷きとして展開されたものである。

(8) この第三の部分の解釈については、前掲注(4)にあげた、江畑武氏の見解に大いに教えをうけた。しかし、この部分に班固の創意、ないしは彼の地理思想を伺いうるとする氏の説は認められるものの、これを地理志の中心課題とする意見には従い難い。「漢書」全体の意図から考えて、この部分はあくまで一試案を提案したものであり、その主張が前の二つの部分の内容にまで及び、それを規定しているとは考えられないからである。あくまで三者は、一応独立したものととらえるべきであると考ええる。